次号予告

BOOKMARK 12
2018 SUMMER

「これ、忘れてない？」

［ブックマーク］
2018年　春号
Take free

BOOKMARK

FREE BOOKLET［ブックマーク］

BOOKMARK

10号の「次号予告」には「目と耳と体の冒険」と書きました。音楽がらみ、スポーツがらみの作品を取りあげようと思ったからです。ところが音楽だけで候補が17冊あがってきて、じゃあ、というわけで、11号は音楽特集になりました。

音楽と文学というと、ぼくの場合、まず頭に浮かぶのはアメリカの作家カート・ヴォネガットの言葉です。彼は根っからのジャズ、ブルーズ好きで、『国のない男』というエッセイ集で「わたしが死んだら、墓碑銘はこう刻んでほしい」と書いています。

彼にとって、神が存在することの証明は音楽ひとつで十分であった。

いかにもヴォネガットらしい言葉ですが、彼に限らず、そう感じている人は多いはずです。

この冊子で紹介した作品で触れられている音楽はクラシック、ジャズ、ブルーズ、ロック、ポップスなどなど、様々ですが、すべて、心から薦めたい作品ばかりです。ぜひ読んでみてください。

（金原瑞人）

村上春樹

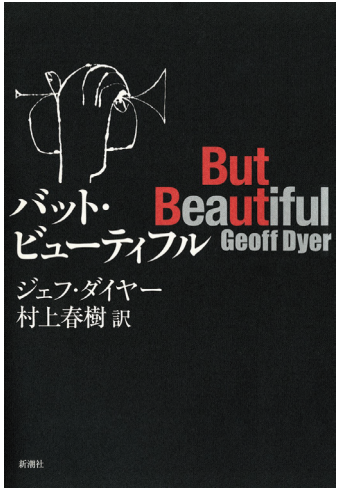
僕は小説家なので、小説を書くかたわら翻訳の仕事をしているわけだけど、依頼を受けて翻訳をするということはまずしない。それが本職ではなく、言うなれば「趣味の翻訳」みたいなものなので、自分で楽しんでやれる翻訳でなければやる意味はないと思っている。だからそういう「楽しめるテキスト」を自分で見つけてくるのが、僕にとっては何より大事な作業になってくる。そしてこのジェフ・ダイヤーの『バット・ビューティフル』は、楽しめるかどうかという点にかけては、とにかく針が振り切れるくらいとことん楽しめるテキストだった。僕は長年にわたる熱心なジャズファンだし、ジャズについて書かれた優れた本を読むことも大好きだから。

僕が最初にこの『バット・ビューティフル』を読んだとき、その恐れを知らぬ大胆さにまず度肝を抜かれてしまった。ダイヤーはジャズファンの間ではよく知られている客観的（歴史的）事実から、自分の想像をまじえた「物語」をどんどん自由に展開していくからだ。まるで絵画に描かれた風景を立体的に立ち上げて、そこにいる人々を自由に動かしていくみたいに。そして読者は、そこに展開する物語のどこまでが事実であって、どこからが作者のイマジネーションなのか、見分けがつかないということになってしまう。僕も翻訳をしながら、「これは果たして事実なのか、それとも作者の自由な（勝手な）肉付けなのか？」と首をひねってしまうことがしばしばあった。要するにこの本はドキュメンタリーでもないし、かといって純粋な小説でもない、まるで鵺（ぬえ）のようなゾーンで成立しているちょっと不思議な読み物なのだ。作者はそのような手法を「想像的批評（imaginative criticism）」と名付けているようだが、しかしそういう細かい理屈は別にして、読み物としてはとにかく無類に面白い。そして僕は小説家として、本書の翻訳をおこないながら、「そうか、なるほどね、こういう手もあるのか」と学ばせてもらうところも多かったように思う。

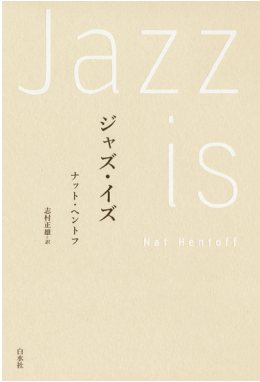
ジャズファンはもちろん、ジャズをあまり聴いたことのない若い人にも手にとって読んでいただけたらなと思っている。行間から音楽が溢れてくるような本です。

[*But Beautiful: A Book About Jazz*]
Geoff Dyer

『バット・ビューティフル』
ジェフ・ダイヤー
村上春樹 訳
（新潮社）¥1,900＋税



11_01



[Jazz is]
Nat Hentoff

『ジャズ・イズ』
ナット・ヘントフ
志村正雄 訳
（白水社）
¥3,000＋税

11人の有名なジャズ・ミュージシャンを中心に、愛情をこめてジャズを語るこの本は、かなりの枚数挿入されているその人たちの演奏写真とともに、魅力あふれる１冊です。

私は職業的翻訳家でもなければ音楽評論家でもないので、親しくしていた編集氏からこの翻訳を依頼されたときには辞退の言葉を連ねたのですが、受け付けてもらえず、やむなく引き受けざるをえない窮地に陥ったのでした。ナット・ヘントフの文章が平易であるからと言って、論じられている11人のうち、私がアポロ劇場やバードランドで直接ナマで聴いているのは、ビリー・ホリデイとルイ・アームストロング、このふたりだけなのです。よくも引き受けたものだと今も呆れています。

解説も書けと言われましたが、これは断断固として拒否。やがて川本三郎さんが解説を書いてくださることになりました。それにしても36年まえのこの翻訳、なんとか生きながらえているのを当時の編集氏に感謝すべきものやら。いやはや。すばらしい写真の撮影者が不明なのも気になります。

（志村正雄）

11_02

[*NOVECENTO Un monologo*]
Alessandro Baricco

『海の上のピアニスト』
アレッサンドロ・バリッコ
草皆伸子 訳
（白水社）
¥950＋税

世紀の変わり目の1900年、大型客船ヴァージニアン号のダンス室に生まれたばかりの男の子が置き去りにされていました。ノヴェチェント（イタリア語で「900」の意）と名付けられた赤ん坊は老船員に育てられ、船上で一生を過ごすこととなります。船の楽団のピアニストとして。

彼の最期をみとった親友のトランペット吹きが舞台の上から語るのが、この唯一無二のピアニスト、ノヴェチェントの数奇な物語です。船から一度も下りたことのないピアニストの噂を聞きつけ、ピアノ演奏の決闘を挑んできた世界的ピアニストとの対決（もちろん、ノヴェチェントが胸のすくような圧勝をおさめます）。下船を決意しつつも、ついに陸に降り立つことができなかったノヴェチェントの懊悩。戦争を経てボロボロになり、廃船処分が決まったヴァージニアン号と運命をともにするエンディングに至るまで、物語は一気に進んでいきます。

一人芝居の形式で書かれたスピード感あふれる作品です。どうぞ、劇場にいる気分でお楽しみあれ。

（草皆伸子）

11 _03

[*The Bells*]
Richard Harvell

『天使の鐘』
リチャード・ハーヴェル
栗原百代／北沢あかね 訳
（柏書房）
¥2,400＋税

スイス山奥の鐘楼で、耳も口も不自由な母親が打ち鳴らす鐘を子守唄に育った少年。孤児になった彼はモーゼスと名付けられ、ザンクトガレンの修道院へ。そこで聖歌隊の歌を聞き、体の奥から突き上げてくる衝動のまま一緒に歌い出すのだった。孤独な少年は歌うことで思いの丈を表現できると知り、彼の声から愛と悦びを全身で感じ取ってくれる少女に出会った。が、その声に魅入られた男が彼をカストラート（去勢歌手）に。苛酷な現実を受け入れ、一度は引き裂かれた愛を一途に貫いたモーゼスの波乱に満ちた半生。陰に日向に彼を支える三人の男との絆にも胸が熱くなる。皇帝一家臨席のウィーン宮廷歌劇場での、声による劇的な再会もつかの間……。読み終えて気がつく。読んだのではない、聞いたのだと。語り手のモーゼスには、耳の不自由な母さんからもらった、どんな音も聞き漏らさない耳があった。その彼の聞く音が、いつの間にか読んでいる私たちにも聞こえていたのだ。もしかしたら、彼の天使の歌声も。モーゼスの世界にぜひ浸っていただきたいと思う。

（北沢あかね）

11 _04

[*Music & Silence*]
Rose Tremain

『音楽と沈黙』
ローズ・トレメイン
渡辺佐智江 訳
（国書刊行会）
Ⅰ・Ⅱ 各¥2,200＋税

英国の歴史小説家ローズ・トレメイン 1999年の作品で、舞台は17世紀デンマーク。国の発展に寄与した伝説の王クレスチャン４世、傍若無人な王宮の嫌われ者で不倫相手とＳＭプレイに耽る王妃、美貌のイギリス人リュート奏者、王妃に仕える可憐な侍女、二人の純愛、女たちの陰謀、北欧諸国をめぐる旅、宮廷楽団が奏でるリュート及び各種古楽器の流麗な響き――。この音楽とロマンスの歴史劇にさらなる命を吹き込めるのは、ハリウッド映画ではなく宝塚歌劇団である。タカラジェンヌの皆さま、もはや、ちょんまげで幕末といった出し物でどん詰まっている場合ではありませぬ。この作品を舞台化しませんか？

カバー装画はカラヴァッジオ。クラシカルで美しい装幀は山田英春。著者の日本での初紹介作品で、17世紀イングランドを舞台にした『道化と王』（金原瑞人、小林みき訳）もぜひご一読を。

（渡辺佐智江）

11_05

[*The House Of Wittgenstein : a family at war*]

Alexander Waugh

『ウィトゲンシュタイン家の人びと -闘う家族』

アレグザンダー・ウォー

塩原通緒 訳

（中央公論新社）

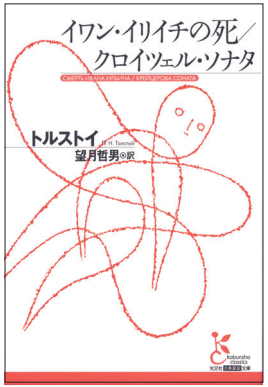
¥3,200＋税

モーリス・ラヴェルの『左手のためのピアノ協奏曲』は、その名のとおり、左手のみで演奏されるピアノ協奏曲。第一次世界大戦の戦場で右腕を失ったピアノ演奏家がラヴェルに依頼して、これを作曲させたのだった。彼は裕福な家の生まれだったので、ほかにもプロコフィエフ、シュトラウス、ブリテンといった著名な作曲家と契約して、自分が演奏するための左手用ピアノ曲を作ってもらった。このピアニストが、本書の主人公のひとり、パウル・ウィトゲンシュタイン。哲学者ルートウィヒ・ウィトゲンシュタインのお兄さんです。

これは19世紀から20世紀にかけての古都ウィーンを舞台に、華麗なる一族の不穏なる100年を綴ったノンフィクション。緊張感あふれる音楽とともに、一癖も二癖もある８人の兄弟姉妹がそれぞれに激動の時代を生きて（あるいは死んで）ゆくのだが、いろいろありすぎて紹介しきれずにすみません。とにかく劇的。そして最後には静謐な余韻が残ります。著者は英国作家イヴリン・ウォーのお孫さん。

（塩原通緒）

11_06



[Смерть Ивана Ильича / Крейцерова соната]

Л. Н. Толстой

『イワン・イリイチの死／
クロイツェル・ソナタ』

トルストイ

望月哲男 訳

（光文社）

¥629＋税

主人公は音楽の力に敏感な男。音楽は彼に、我を忘れて異世界に連れ去られるような、圧倒的な印象をもたらします。そんな彼が客間でクロイツェル・ソナタを聴くのは、危険な体験でした。行進曲に合わせて歩くのも、舞踏曲に合わせて踊るのも合理的だ。しかしクロイツェル・ソナタの煽情的なプレストを聴いてただじっとしていたら、掻き立てられたままやり場のない感情が、人を狂わすのではないか？　彼の危惧は現実化し、まるで共演する妻とバイオリニストとの濃密な情事の現場を見せられたような印象が残ります。疑惑と嫉妬の虜となった男は、やがて妻を殺す……。

汽車旅の夜話として描かれたこの物語の中では、音楽だけでなくあらゆる文化や制度が、野蛮な欲望をカムフラージュする欺瞞の道具と見なされます。結婚とは体のよい売春であり、医学は放蕩に奉仕している……。そんな文脈で語られる音楽論はやはり奇矯ですが、物語自体は絶妙な均衡を保っています。主人公の語り口に現れる感情の起伏が、ベートーヴェンの「危険な」楽曲そのものと、強く共鳴し合っているからです。

（望月哲男）

11_07

[*The Piano Shop on the Left Bank*]

T. E. Carhart

『パリ左岸のピアノ工房』

T・E・カーハート

村松 潔 訳

（新潮社）

¥2,000＋税

パリのセーヌ左岸。カルチエ・ラタンからほど近い裏通りにピアノの修理屋らしい店がある。ショー・ウィンドにピアノの部品や調律の道具がいくつか無造作に置いてあるだけの店。数年前から近所に住んでいる著者はこの店がなんとなく気になっているが、いまはピアノをもっているわけでもなく、なかなか店に入っていく勇気は出てこない。けれども、やがて、中古ピアノを探しているという口実を思いついて、思いきってその店のドアを押してみると……。

そこにはピアノを生き物のように扱う職人がいて、ピアノに愛着をもつ人たちの小世界があり、経済ばかりが優先される現代の社会とはまったく異質な時間が流れている。著者はそういうパリの住人たちの世界に受け容れられるとともに、20年ぶりにピアノと音楽のある生活を再発見して、ますますピアノへの愛着を深めていく。ピアノという巨大な楽器の内臓を覗きこんだり、近代のピアノが成立するまでの歴史を肌で感じたり、ピアノにまつわるあらゆる話が楽しめる本になっています。

（村松 潔）

11_08

[*Last Song Before Night*]

Ilana C. Myer

『吟遊詩人の魔法』

イラナ・C・マイヤー

鍛治靖子 訳

（東京創元社）

上・下 各¥1,000＋税

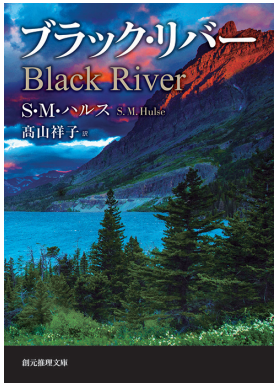
昔、吟遊詩人の歌には魔法が宿っていた。いま、その魔法は失われ、吟遊詩人の歌はただの音楽と言葉でしかない。失われた魔法を、自分たちの運命を、真実の愛を求めて、若者たちが旅をする。

太陽と月に譬えられる二人組の吟遊詩人、陽気なダリエンと影を帯びたマーレン。女は吟遊詩人になれない世界でなおも詩人であろうとするリン。都一の豪商の娘リアンナ。謎めいた娼婦マライラ。彼らの行く手に待ち受けるものは何か。運命は彼らをどこへ連れていこうとしているのか。

裏切り、恋、友情、そんなありきたりの題材を扱い、ファンタジイの王道ともいえる設定を備えながら、いま、まったく新しい物語がはじまる。吟遊詩人の競技会、視者、白の都、仮面祭、銀の枝、黄金の竪琴、学院島、異界への道、探索の旅、血の呪術、赤死病――心躍る言葉をちりばめて、夢と現実が幾度となく交錯する。若者たちが出会い、別れ、また邂逅する。

豊かな音楽と色彩があふれる美しい世界で、さあ、高らかに歌おう。　（鍛治靖子）

11 _09



[*Black River*]
S. M. Hulse

『ブラック・リバー』
S・M・ハルス
髙山祥子 訳
（東京創元社）
¥1,080＋税

「わたしのためにフィドルを弾いて」妻の最期の願いを、ウェズリーは叶えてやれなかった。彼は静かに妻を見取り、その遺骨とともに十八年ぶりに故郷の町に帰る。

モンタナ州ブラック・リバーに住んでいたころ、ウェズリーは刑務官として州立刑務所で働くいっぽう、バンドを組んで収穫祭のステージに立つ、優れたフィドル奏者でもあった。妻との出会い、つましくても愛のある家庭生活……どんなときにも、彼が奏でるブルーグラスの音楽があった。だが二十年前に刑務所で起きた暴動で人生は一変する。もうウェズリーに、フィドルを弾くことはできない。

今回の故郷への帰還には特別な目的があった。暴動の首謀者の仮釈放を検討する公聴会で、証言を求められていたのだ。ウェズリーからフィドルを奪い、最愛の妻の願いさえも奪うことになった暴動の首謀者について、いま彼は何を言うべきなのか？　自然豊かなモンタナ州で繰り広げられる、過酷な人生に真摯に向き合う男の物語には、凛として美しく、どこか物悲しいフィドルの音色がよく似合う。

（髙山祥子）

11 _10

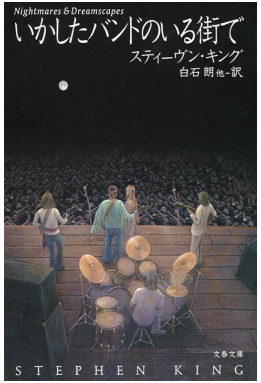
[*NOCTURNES*
Five Stories of Music and Nightfall]
Kazuo Ishiguro

『夜想曲集 音楽と夕暮れをめぐる五つの物語』
カズオ・イシグロ
土屋政雄 訳
（早川書房）
¥780＋税

ノーベル賞作家カズオ・イシグロの唯一の短篇集。これ用に書き下ろされた五つの短篇（といいつつ、ノベラといってもおかしくない作品）を収めている。「五篇を一つのものとして」味わってほしいという作者自身の言葉もあり、いわば五曲からなる一つのアルバム、もしくは五楽章からなる一楽曲という感じだろうか。副題に「音楽と夕暮れをめぐる五つの物語」とあるように音楽と夕暮れがテーマだが、味わいはなかなかにシュールである。どの登場人物も夫婦間もしくは男女間の危機を抱えていて、少しずつ普通ではない。いまも愛し合う妻と離婚して若い女と再婚し、その話題にのっかって返り咲きを果たそうともくろむ往年の大歌手とか、凡庸さに付け込まれ、かつての親友に夫婦関係修復の道具として利用されているのを承知で、役割を必死で果たそうとする冴えないアラフィフ男とか……。自身の才能の偉大さを信じ、それが捻じ曲げられることを恐れるあまりどんな音楽教師にもつかず、結局は演奏ができない自称チェロ奏者なども登場して、シュール感はきわまりない。

（土屋政雄）

11 _ 11



[*Nightmares & Dreamscapes*]
Stephen King

『いかしたバンドのいる街で』
スティーヴン・キング
白石 朗 他 訳
（文藝春秋）
¥590＋税

この中篇の作者スティーヴン・キングの音楽好きは有名です。執筆中はハードロックを大音量で流し、作品にどっさり盛りこまれた音楽への言及は登場人物造型や時代背景の描出と不可分、かつては作家仲間と組んだバンドでギターを弾いたり熱唱したり、音楽専門のラジオ局をつくったり。そしてこの中篇で音楽大好きなキングは、ホラー作家としての腕によりをかけ、この世のものとは思えない豪華絢爛たるメンバーが総出演するロックフェスが永遠につづく夢の街、ロックンロールヘヴンをつくりあげました。この街で主人公夫妻は“ロックンロールは決して死なない”という名言が真実であることを身をもって知るのです。

主人公夫妻は車での旅行中にこの夢の街に偶然たどりつきますが……その前の段階、運転をしていて道に迷ってしまった夫と助手席の妻とのあいだに交わされる一触即発の気配をたたえた不穏な会話が後半への導火線になっているあたりにも、ぜひともご注目を。

（白石 朗）

11 _ 12

[*The Lucy Variations*]
Sara Zarr

『ルーシー変奏曲』
サラ・ザール
西本かおる 訳
（小学館）
¥1,500＋税

幼いころから天才ピアニストとして脚光をあびていたルーシー。15歳のある日、家族の問題がきっかけで、コンクールの大舞台でピアノの前から逃げだしてしまった。厳格な祖父の「二度とピアノを弾かないと決めたんだな」という言葉が重くのしかかり、音楽から離れていたが、あるピアノ教師との出会いで少しずつ心がほぐれ、本当の自分を、音楽への愛を再認識する。

これはピアニストの話であり、ふつうの16歳の女の子の成長物語でもある。家族や友だちへの思い、人間関係の悩み、重圧、不安、葛藤、夢、恋……さまざまな変奏がくりかえされ、「ルーシー」を主旋律とする大きな変奏曲ができあがっていく。

音楽モノならではの楽しみが、ショパン、ヴィヴァルディ、ブラームスなどなど、ルーシーの心に寄りそう曲がちりばめられていること。この本を読むときは、ぜひ曲にもふれてみてほしい。訳しながら聴いた現代作曲家フィリップ・グラスの「メタモルフォシス」は大好きな曲になった。

（西本かおる）

11_13

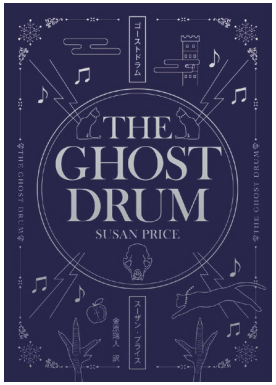
[*Eleanor & Park*]
Rainbow Rowell

『エレナーとパーク』
レインボー・ローウェル
三辺律子 訳
（辰巳出版）
¥1,900＋税

何を隠そう、私が訳した初の王道恋愛小説だ。訳書は圧倒的にファンタジーが多いし、ホラーも大好きだけど、どうも恋愛小説は苦手。もちろんファンタジーやホラーでも、登場人物たちが恋をすることはあるけど、あくまでサイドストーリーだったり、相手が魔女だったり龍だったり。だから、この『エレナーとパーク』がアメリカで大ベストセラーになっているのを知っても、訳者としての興味はわかなかった。ところが、出版社から「読んでみて」と依頼がきて、そういうことなら、と開いたとたん、恋に落ちた。

舞台は80年代。エレナーは赤毛で太めの女の子で、家では母の恋人の暴力に怯え、貧しくておしゃれをする余裕もない。一方のパークは、町では珍しいアジア系で、弟には背を抜かされ、スポーツよりアメコミとＵＫロックを愛するサブカル男子だ。そう、最初「王道」と書いたけれど、二人ともおおよそ恋愛小説の主人公にはなりそうにない。アメリカの学園物の定番のプロムも出てこない。けれど、スクールバスで出会い、好きな曲（もちろん曲名つき）を集めたテープを交換し、コミック雑誌の発売日に連載の続きをいっしょに読み……やっぱり最高にドキドキする「王道」の恋愛小説なのだ。（三辺律子）

11_14



[*The Ghost Drum*]
Susan Price

『ゴーストドラム』
スーザン・プライス
金原瑞人 訳
（サウザンブックス社）
¥1,900＋税

北の国の魔女チンギスが、文字や模様の描かれたゴーストドラムの上に小動物の頭蓋骨を置き、質問をして、太鼓の革を指先で軽くたたくと、その振動で頭蓋骨が跳ねたりすべったりして、文字や模様の間を行き来する。そこから意味を読み取ることができれば、質問の答えが得られる。チンギスはその練習を重ねると同時に、導き手の老婆からリュートの弾き方を教わる。弦をはじくと、小波のような音が、真珠でかこまれた丸い口を通って、胴から流れ出る。音楽は、人の心のなかに住む、心の言葉だ。だから、人の口から出る言葉を心の言葉にのせれば、つまり魔法使いがその音楽に言葉をのせれば、心を持つ者すべてを意のままにできる。チンギスはこんなふうに言葉と音楽を操ることを学んでいくのだが、その前に立ちはだかるのが、氷のリンゴを摘み取る男クズマ。雪原をまっ赤に染めて展開する愛と暴力のファンタジー、どうぞ読んでみてほしい。これは３部作の第１部で、未訳ながら、このあと『ゴーストソング』『ゴーストダンス』と続く。

（金原瑞人）

11_15

[*Zeit der Zikaden*]
Andreas Séché

『蟬の交響詩』
アンドレアス・セシェ
酒寄進一 訳
（西村書店）
¥1,500＋税

北アメリカには17年間地中で過ごし、いっせいに空に飛び立つ蝉がいるという。作中ではその理由についてこう語られる「世界中のどんな敵も蝉を根絶やしにはできない」

じっと時が満ちるのを待ち、なにかに対していっせいに声をあげる。独裁国家の島国を舞台にしたこの物語では、蝉は自由の象徴だ。そう、ここでは圧政に苦しみ、自由を希求する市民が「蝉」なのだ。では市民たちはなにをもって時が満ちたことを知るのだろう。

そこにあらわれるのがバイオリン弾きのセリム。圧政の下で師匠を失い、恋人とも生き別れる。彼に残されたのはバイオリン一挺だけ。彼は人の心に想いを届けるためにパガニーニやサラサーテらの名曲を演奏する。そして人々の目覚めの時を告げる暁鶏となるのがサン＝サーンスの〈死の舞踏〉。死をも目覚めさせるこの曲で、セリムはなにを成し遂げるのだろう。ぜひ楽曲を鑑賞しながら読書してほしい。

「自由を抑圧する者は、自由を滅ぼすことはなく、むしろ人々の自由を欲する気持ちを強くする」そんな想いを音楽に託し、セリムの半生が語られるこの物語をご賞味あれ。

（酒寄進一）

11_16

[*Un avion sans elle*]
Michel Bussi

『彼女のいない飛行機』
ミシェル・ビュッシ
平岡 敦 訳
（集英社）
¥1,200＋税

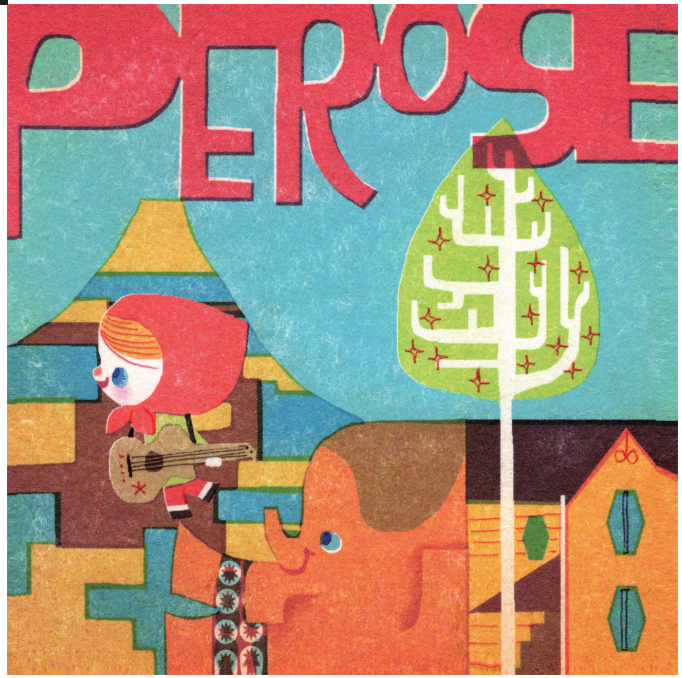
昔、流行った歌を聞いて、気持ちがその時代へいっきに引き戻された経験は、誰にでもあるはずだ。この作品には、そんな人間の心理を突いた仕掛けがなされている。『彼女のいない飛行機』というちょっと奇妙なタイトルは、フランスで1981年に大ヒットした『翼のない飛行機のように』という歌に引っかけているのだ（「彼女」と「翼」という語は、フランス語でどちらも同じ音）。作中でもこの歌が、BGMのように繰り返し登場する。飛行機事故でたったひとり生き残った赤ん坊は誰だったのかをめぐり、二つの家族が18年にわたって争うこの愛憎劇では、時の流れが大きなモチーフになっている。フランス人ならばタイトルを聞いただけで、物語の発端となった1981年という年が脳裏によみがえり、過ぎ去った歳月の重みが胸に迫ってくるのだろう。フランス人ならぬ身には、そこのところを実感として捉えられないのがもどかしいけれど、日本で1981年にヒットした曲に例えるなら、寺尾聰の『ルビーの指輪』でも思い浮かべながら読んでもらえるといいかもしれない。

（平岡 敦）

Pick Up Creator

山本まもる
Yamamoto Mamoru
http://www.mamoruyamamoto.com

山本まもる個展
「不思議の国のペロずきん」
2018年4月19日（木）---4月27日（金）
大阪・天満橋 / GALERY 14Th MOON



「PEROSE」

BOOKMARK 11
［ブックマーク］ 2018 SPRING

２０１８年03月 発行
印刷：グラフィック

URL：kanehara.jp/bookmark/
Twitter：@bookmarkFB
Facebook：facebook.com/bookmarkfreebooklet/

編集・発行
金原瑞人（法政大学教授・翻訳家）

本に救われた……というエッセイや談話をよく目にするが、人を救うのは本だけじゃない。音楽や、アートや、スポーツに救われた人も多いはずだ。ただ、そのなかで本がいちばんずるい。本はじつにうまく、音楽やアートやスポーツを取りこむ（その逆は難しい）。今回取りあげた作品を読んで、そんな本のずるさを楽しんでほしいと思う。

編集
三辺律子（英米文学翻訳家）

ときどき音楽ってずるいって思う。本は、字が読めて、言葉を知らないと楽しめないし、基本、最初から最後まで読まないとわからないし、それには忍耐もいる。でも、音楽は一瞬にして人の心をとらえられる。今回は、そんな音楽の力をしっかり借りている本たちを。

イラスト・ブックデザイン
オザワミカ（イラストレーターとかいろいろ）

音楽にまつわる本……と考えたときに、「悪魔が来りて笛を吹く」しか頭に浮かんでこなかったわたしで本当にごめんなさい。

協力
宮坂宏美　田中亜希子　中村久里子